

戦後65年を前にあかされた元捕虜の苦悩

SBSスペシャル

日本兵サカイタイゾーの真実

～写真の裏に残した言葉～



海兵隊戦争記念碑 バージニア州アーリントン

岸本 達也

(静岡放送 報道局情報センター)

題字

中川 順

みんなの語り
ろう民放史

今回の『民放史』は硫黄島で自らの意思で敵に投降した兵士の苦悩を描いた《現場からの発言》です。

放送は2009年5月4日。

菊村到の芥川賞作品『硫黄島』は、捕虜になった兵士が、玉砕の島に帰って自ら命を絶つ―戦場の心の傷に押し潰される姿を描いた名作です。

この作品も同じく捕虜の姿を描いており、ギャラクシー賞の選評にあるように、サカイタイゾーの《戦争が終わることを望んだが故の苦悩が、くつきりと浮き出て》いる力作です。

『みんなで語ろう民放史』は三号連続で地方の《現場からの発言》でした。ダム、沖縄、硫黄島と、いずれも時宜を得た発言であると同時に、財政的に苦しい地方局が、苦しさを撥ね退けて頑張る意欲を知って頂きたいと思います。

プロローグ

放送から2ヶ月経過した昨年7月、小雨交じりの高速道路を静岡から東へ向け走っていた。この日は、富士山の麓にある霊園で坂本泰三さんの二十三回忌が営まれる車窓に流れ行く風景を手繰り寄せるかのように、私はこれまでのことを振り返っていた。

写真は遺族の元へ戻って、本当に良かったのだろうか。気持ちちはなお、揺れていた。

硫黄島で託された写真

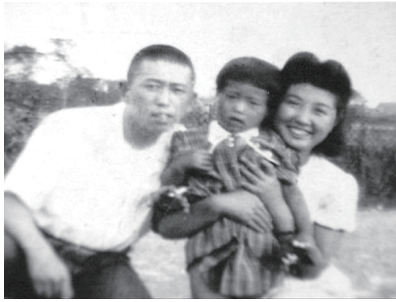
これは映画ではない

それは2006年10月、静岡市在住の男性から、ある写真を見せてもらったことに始まる。男性は、同じ年の春、カナダのスキーツアに参加。その際、偶然居合わせたカリフォルニア州在住の弁護士、ステイブ・ロパルドさんから写真のコピーを受け取った。「父の遺志を受け継ぎ、写真を日本兵に返したい」。ステイブさんはそう繰り返して、日本兵捜索への協力を求めてきたという。写真は、いまから65年前、硫黄島で日本兵がアメ

リカ兵に託したものであった。

太平洋戦争末期、最大の激戦地となった硫黄島。1945年2月19日、アメリカ軍が上陸。36日間におたる日米の攻防戦は、両軍合わせて約2万7千人という、おびただしい数の戦死者を出した。

戦いが始まってからちょうど1ヶ月、戦闘の最中、一人の日本兵がアメリカ軍に投降した。そのとき、この兵の尋問に当たったのが、当時、海兵隊の中尉として戦ったステイブさんの父親だった。捕虜は自らを「サカイタイゾー」と名乗った。



託されたサカイタイゾーの写真

暗く狭い塹壕の中で約三時間、二人は尋問官と捕虜という間柄ではあったものの、互いに話せたフ

ランス語で会話を重ねるうちに親交を深めていったという。そして、サカイ氏は下着の中から写真を取り出し、こう持ちかけた。「これは私に残された一番大切なものです。いずれは没収されてしまうでしょうから、私としてはあなたに預かっていてもらいたい」。

「まるで映画のような話でしょう、男性が興奮気味に話を続けている。折しも、この年の冬、クリント・イーストウッド監督による硫黄島二部作の公開が控えていた。戦場に咲いた一輪の花ということか。耳を傾けながらも、私はどうも釈然としない。そんな美しいストーリーが、本当にありえるのだろうか。美談の裏に潜む「何か」があるような気がしてならなかった。なぜなら、そこは映画館ではない。本物の殺し合いが行われた絶望的な戦場であり、「玉砕の島」として戦史にその名を刻む硫黄島だからである。

二万人の中の一人を探す

ほどなくして、サカイ氏の行方を捜す取材が始まった。が、手掛かりは戦場で託された小さな写

真のみ。昨今の放送業界、とりわけ地方局を取り巻く厳しい経営環境の只中にあるのは、当てのない取材がそう簡単に認められる筈もなかった。たったひとり、休日を利用して東京の防衛研究所で史料を読み漁ったり、軍関係の名簿から硫黄島生還者を捜し出すなどの個人取材を続けた。

しかし、それは困難を極めた。硫黄島で戦った2万人の日本兵のうち、奇跡的に生き残った兵士はわずかに1000人。60余年の歳月が、さらに追い討ちをかけ、すでにその大半は亡くなっていた。



硫黄島の戦い
(1945年2月19日-3月26日)

存命する生還者は、いまや10人とも20人ともいわれている。それでも何とかして生還者を捜し当てたものの、皆、写真に収まる人物

に見覚えはないという。サカイ氏の写真にまつわる話をしても、まるでかみ合わない。

それもそのはずだった。「ひとたびアメリカ軍に見つかれば、上空から雨のような機銃掃射ですよ。死んだふりをしていても、動いたら撃たれるか、刺されるかですからね」。「向こうはこちらに食料がないというのを知っていて、罠を仕掛けるわけです。うっかり缶詰でも拾おうものなら、即座に手榴弾の餌食になりました」。「最後は海水にガソリンを混ぜて、壕の中に流し込んでくるわけです。水だ!と思ったなら、火炎放射器で一気にやられてしまつて」。生還者の語る戦場に、思わず言葉を失った。その憎悪に満ちた渴き切った大地に、美しい花など咲くはずもなかった。やはり、美談とは程遠い。2年間に及ぶ生還者への聞き取りから、そんな思いを強くしていた頃だった。

事態は突然、大きく動き出した。

日本兵サカイタイゾーの真実

2008年9月、厚生労働省から一通の手紙が届いた。それは、

サカイ氏の遺族を特定したことを伝える通知だった。実は、その5カ月前、当局に遺留品の調査を依頼していたのだった。

何の手掛かりも得られぬまま過ぎて去っていった2年間、その存在がぐつと近づいたように思えた。が、その書面に思わず目を疑った。「写真の所有者・坂本泰三」とある。何かの間違いではないか、当局に確認したが、やはり「坂本」だった。「サカイ」は実在しない。偽名であった。

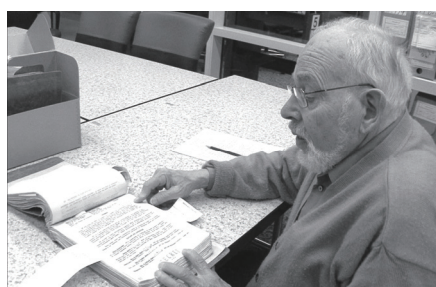
やはり「何か」あると思っていた。美しいだけでは済まされない「何か」が。それからまもなくして、坂本泰三さんの遺族に会った。「なぜ、父は「サカイ」と名乗ったのでしょうか」。父親は、自らの戦地での「出来事」について語ることはなかったという。坂本泰三さんは戦場でなにを考え、どのように行動したのか。そして、アメリカ側の尋問に対し、なぜ、「サカイ」という偽名を貫き通したのか。そこにある日本兵サカイタイゾーの真実とは――。

時を同じくして、アメリカ国立公文書館でサカイ氏の尋問調書が確認されたと、現地から連絡が入

った。そして、上司から思いがけない提案があった。

「アメリカに行ってくるのか」
経営はますます厳しさを増している。社の英断であった。

ワシントンD.C.から車で約1時間、郊外の町を走り抜け、アメリカ国立公文書館に到着した。第二次世界大戦中、対日戦を有利に展開するため、徹底的に情報を収集したアメリカ軍。ここには膨大な数の日本兵捕虜に関する資料が保管されている。



サカイ氏の尋問調書
アメリカ国立公文書館にて

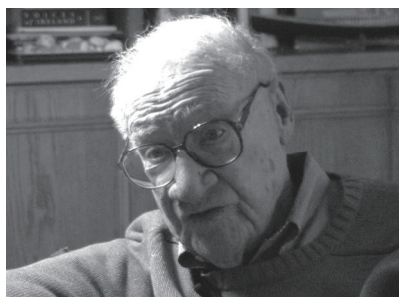
調査を依頼した公文書館リサーチャー、ダン・グロスさんは、おもむろにファイルを取り出し、こ

う読み上げた。「名前・サカイタイゾー／性別・男／身長・5フィート4インチ(約160センチ)／体重・60キロ／目の色・茶色／頭髪・黒／年齢・28歳／階級・伍長／部隊・第109師団司令部通信隊」。それは、日本兵サカイタイゾーの尋問調書だった。さらに、そこにはサカイ氏が硫黄島総指揮官・栗林忠道陸軍中将の通信担当員であったことも記されていた。サカイ氏は栗林中将の指揮を暗号化し、送信する任務に当たっていたという。

グロスさんは続けた。「サカイ氏は暗号や伝令の内容を知っていた。だからアメリカ軍の情報局は、彼から有益な情報が得られると判断したのです」。栗林中将の傍らで様々な情報を知りうる立場にいたサカイ氏。調書には日本軍の組織、軍備、そして暗号に至るまで事細かに記されていた。サカイ氏は軍の機密を、アメリカ軍に提供していた。

調書には、「この捕虜が我々に対し協力的であるのは、東京で受けた外国語教育の影響が大きい」と記されている。サカイ氏は、戦前、フランス人によって設立された東京・御茶ノ水にあるアテネ・フラ

ンセで学んでいた。同校の松本校長はサカイ氏の2年後輩で、開戦時「アメリカと戦争するのは間違いだ、この戦争を早く終わらせなければいけない」と考えていたという。



サカイ氏を尋問した元アメリカ海兵隊員

60余年前、硫黄島でサカイ氏を尋問した元アメリカ海兵隊の言語士官、リチャード・ホワイトさんもちょう振り返る。ホワイトさんはいまでもサカイ氏のことを鮮明に記憶していた。彼は日本が負けることを確信していました。負けるのだから、もう戦闘をやめるべきだとも。洞窟から出てきてバンザイ突撃をする日本兵を彼は狂信的だと思っています。仲間に対し同情はしていたものの、やはりそ

れは間違っていると考えていました」。

尋問に際し、サカイ氏はアメリカ軍に協力する道を選んだ。やがて彼はワシントンD.C.にほど近い《秘密捕虜収容所》に移送される。ここで捕虜が明かした情報はペンタゴンに直結するという。アメリカにとって戦略的に最も重要な捕虜収容所だった。

写真の裏に残した言葉

2008年12月、アメリカ兵の遺族、ステイブさんが来日した。写真は63年ぶりに再び祖国の地を踏み、横浜市に住む遺族に返還された。ステイブさんから、戦場で写真が託された経緯、そしてこの日まで、それを大切に保管してきたことなどが伝えられ、遺族もその美談に感激した。が、やはり、「サカイ」に戸惑っていた。遺族に「サカイ」のことを告げるべきであろうか。しかし、実の父親が口にしなかったことを、どうして一取材者にすぎない私が告げられようか。平穩な暮らしを送る遺族に辛い思いをさせる権利など、私には全くない。このままそつとし

ておこうとも思った。が、その2カ月後、またしても新たな真実が明らかになった。

2009年2月、TBS『報道特集NEXT』で、写真が返還されるまでの経緯をまとめた。その中で、サカイ氏がステイブさんの父親に写真を託す際、裏に書き残したある言葉について触れた。『Sois Sage, o ma Douleur』。放送後、フランス文学に造詣の深い視聴者数名から、同じような内容の便りを頂いた。「これはフランスの詩人、ボードレールの『悪の華』の一節ではないか。すぐに図書館へと駆け込み、『悪の華』の頁を繰った。そして、『Sois Sage, o ma Douleur』が始まる一節を見つけた。

『悪の華』 ボードレール 「沈思」 訳／堀口大聖

おお、わが「苦悩」よ、

ききわけて、静かなれ。

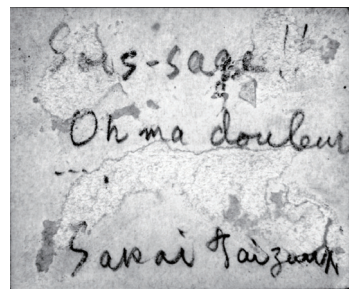
おん身、「夕暮」を待ち侘びたるに、

いま、日は暮れて、夜となる。

暗きかげ街を被ふ、

或る者に平安を、
或る者に不安をば、もたらして。

サカイ氏が写真の裏に残したのは、この一行目である。



写真の裏面に残した言葉

画家を夢見て、フランス語を学んでいたという。しかし、戦後、本格的に絵を描くことはなかった。祖国を、戦友を裏切ったことへの「苦悩」だったのであろうか。そう、確かに、玉砕の島の生存者の一人は彼を「国賊」と断罪する。アメリカ軍に投降した理由について、サカイ氏は調書に次のように述べている。「勝てない戦争のさらなる惨害から間違つて教え込まれた日本の一般国民を救いたい」と。サカイ氏はこの戦争を一日でも早く終わらせるため、アメリカ軍に投降するという道を選んだ。が、その時すでに新たな苦しみが自らに忍び寄ってくるのを覚悟していたのであろうか。アメ

リカ側の尋問に対し、「サカイ」という別人に成り済ますことで、あるいは、自らの「苦悩」を覆い隠そうとしたのかもしれない―《わが「苦悩」よ、ききわけて、静かなれ》。

坂本泰三さんは、1987年、68歳でその生涯を閉じた。戦後、自らの「苦悩」を誰かに打ち明けることが出来たのなら、それでも少しは楽になったのかもしれない。せめて、最愛の家族にだけでも。私は「サカイ」について、「父親の戦争」について遺族に告げた。

坂本泰三さんに捧ぐ

富士山の麓にある霊園に着いたのは、ちょうど昼前だった。もうすっかり雨もやみ、少し晴れ間が覗いている。坂本さんの墓前には、花が供えられ、まわりを子や孫たちが囲んでいる。

もしあの時、「サカイ」として生き残ることがなければ、ここにいてほとんどの人は、いま存在していないだろう。坂本泰三さんは、死よりも苦しい戦後を生きたのかもしれない。しかし、自らの「苦

悩」と引き換えにいくつかの命を繋いだ。いま、その命ひとつひとつが、父親の「真実」を受け止め、「苦悩」を包み込もうとしている。子どもたちは交々と口にする。「良心の呵責みたいなものがあつたのでは」「亡くなるまでずっと背負い続けたにちがいない」「辛い人生だった」と。



硫黄島で託された写真は63年ぶりに遺族の元へ返還された

写真は、やはり遺族の元へ戻って良かったのだと思う。

エピソード

昨年10月、私のところへある1本の電話が入った。相手は元NHKプロデューサーで現代史を中心

としたドキュメンタリー番組を多く手掛け、現在はノンフィクション作家として活躍する中田整一さんであった。用件は「サカイタイゾーについて」であった。

後日、東京でお会いし詳細を訪ねると、中田さんは日本兵捕虜秘密尋問所について調べを進めているということであった。その著書『トレイシー』は今年4月に上梓され、このたび第32回講談社ノンフィクション賞を受賞された。サカイタイゾーは「第七章 硫黄島の秘密」に登場する。

実はいま、私もサカイタイゾーについての取材記を執筆しています。中田さんとそのご友人である作家、辺見じゅんさんに薦められてのことです。刊行は来年の夏の予定です。

〔資料提供 静岡放送〕

この番組は09年「地方の時代」映像祭グランプリ、民放連賞テレビ報道最優秀、芸術祭優秀賞、ギャラクシー選奨など数々の賞に輝いています。

(編集委員会注)

会員だより



☆北海道地区

伊東 英輔 (HBC)

好きなゴルフに関わっていても多忙である。北海道の名門・小樽カントリーでは、理事を命じられトーナメントの世話役をさせられている。

先日のサン・クロレラ・クラシックでは、テレビ中継の手伝いの下働きで観戦する暇もなかったが予選60位でやっと予選通過した石川遼君が、決勝ラウンド一日目、国内最長の7471ヤード・パー



コースレコード賞の目録を渡す
(写真提供 小樽CC)

72の小樽CCでコースレコード63を達成した。

9ホール・バーデイのスコアカードを受け取りスコアチェックに立会い、妙に緊張し数字を見て感激した一日だった。

山崎甲子男 (STV)

高校卒業50周年の同期会の目玉が、ハワイアンバンドの生演奏だった。メンバー全員が同窓で、平均年齢70歳、旧友130人が青春時代の音楽を楽しんでくれた。合唱では、今年11月に宮崎で開かれる全日本男声合唱フェスタに、北海道代表の一員として参加する。ジャズでは40代の音楽仲間とユニ



ジャズ・コーラス ユニットのライブ